

長期間の高温に対する農作物等の技術対策

【果 樹】

1 高温・乾燥の影響

- (1) 果実の陽光面では果実温が高くなり、日焼け果（カンキツ、カキ、ブドウ、キウイフルーツ）が多発する。
- (2) カンキツ、ブドウ、イチジクでは、着色遅延や着色不良を招く。
- (3) 成熟期の高温は、成熟異常果（軟熟果、過熟果、果肉褐変等）を誘発する。
- (4) 収穫後（流通段階を含む）の高温により果実の日持ち性が悪くなる。
- (5) カンキツ、ブドウでは、乾燥後の急激な降雨により裂果発生の危険が高まる。
- (6) 施設果樹では、高温になりすぎて葉焼けや樹体の衰弱等が発生する。
- (7) 露地果樹では、土壌が乾燥しすぎると葉焼けや落葉が発生し、樹勢が低下する。
- (8) 苗木では、葉焼けや萎凋が発生し、症状が進むと枯死につながる。

2 対策

- (1) 十分なかん水と敷きわら等を行い、根域の水分保持と昇温抑制に努める。
- (2) 園内の夜温を少しでも下げするためには、日没後のかん水が有効。
- (3) 乾燥後に急激な降雨が予想される場合は、事前のかん水により裂果の防止を図る。
- (4) 苗木や幼木は根量が少ないため、優先的にかん水を行う。
- (5) 日焼け果の発生防止として、徒長枝の誘引等によって果実に日影を作る。また、カンキツではサンテ（果面保護資材）被覆やカルシウム剤散布、表層摘果等、キウイフルーツ、ブドウでは笠掛けにより日焼け果の発生を軽減する。
- (6) 着果過多の場合は、早めに摘果・摘房を行い、果実肥大・品質向上および樹体養分の浪費防止を図る。
- (7) 適熟収穫に努めるとともに、日焼け果や成熟異常果が混入しないよう、収穫前の果実品質の把握と選果選別を徹底する。
- (8) 収穫は果実温が低い早朝に行うとともに、収穫果実の品温を上げないよう収穫後や搬送中のコンテナには日除けシート等を被せる。なお、イチジクでは予冷し、品温を下げる。
- (9) 収穫中の施設果樹では、妻面の開放や、換気扇、循環扇を活用し、異常高温を回避する。収穫が終了した施設果樹は、速やかに天井被覆を開放し、十分なかん水を行う。
- (10) 高温乾燥時は、特に害虫（シンクイムシ、ハマキムシ、アザミウマ類、ハダニ類）等が発生しやすくなるため、早期発見・早期防除に努める。ただし、高温条件下での薬剤散布は、薬害発生リスクが高いため、早朝等気温の低い時間帯に防除を行う。